

光の子



No.131 2008.8.25

●今年の聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(ヨハネ福音書12章24節)



「ぼくにもね！」

挿絵・中島英子

「盆路」

梅雨明のまづ子を叱る声のして

一鳥の影をも置かず田水沸く

貨車一両とりかこみたる草いきれ

水鉄砲父に狙ひを定めけり

しらじらと盆路うかぶ月夜かな

夕風のまつはる硯洗ひけり

一掬の水の旨さよ原爆忌

黛 執（春野「主宰」）

パラグアイの三つの結婚式 (その二)

JICAシニア海外ボランティア 仙道 富士郎

パラグアイの三つの結婚式のなかで、最も印象深かったのは田舎の結婚式であった。土曜日であったが（確か、三つの結婚式すべて土曜日）、その日は教会では八つの結婚式があったとかで、なんと各結婚式は十五分で片付けられ、てしまった。あまりにもひどい話ではあるのだが、パラグアイの人達は、「教会は儲かったね」というくらいで、あまり文句も言わない。短い結婚式が終わり、Tさんの農場のある村で行われる披露宴会場に向かうことになったが、バスで教会まで来た多くの人は帰りの交通手段がないらしい。Tさんが彼らと話をしていたが、子どもたちも含めた十数人がTさんの小型トラックに乗り込んで、帰路はかなりデコボコ多い山道なのだが、子どもたちは荷台で

騒ぎに騒いでいた。披露宴はTさんの山小屋（と呼ぶにはちょっと立派すぎるが）、の隣に位置する花嫁の父である農場管理人の家の広い庭で始まった。たくさん並べられた白いテーブルとそれを囲む椅子、大きな音の出る音響装置など、皆、結婚披露宴を商売にする業者がしつらえたものだという。ここでも、なんのスピーチもない。花嫁の父親は、間断なく動き回り、ビールをのぶたつたテーブルを見つけては、ビールを置き、栓を抜いていた。驚いたことに、Tさんの山小屋から少し離れた別の場所でも牛を飼ったりする仕事をTさんにまかせられている人も、花嫁の父と同様に、私たちが会場を離れるまでは、席につかず、動きまわっていた。宴に参加していた二人の子どもたちのことを、いまでも私は忘れることができる。私たちの席の近くに座っていた、まだ年端も行かない女の子が、幼児の面倒を長い時間ずっとみている。気になって時々そちらの方に眼を向けると、まだ幼児を抱いたままである。一時間以上経過し、ようやく幼児の母親らしい人が来てその幼児を連れて行った。その後、その女の子

とを忘れてTさんと話していたが、ややあって、彼女の方を窺うと、なんと別の幼児の面倒を見ている。彼女は私たちがその席にいた、三時間半の間、幼児の世話を見続けたのだ。Tさんに歳を聞くと十一歳という。もう一人の子は男の子で、牛の世話を任されている夫婦の息子である。学校に行く途中上級生と喧嘩をして、勝ってしまうほどのきかんぼうであると聞いていた。父は宴の手伝いに忙しく、一向に彼のところにはきてくれない。彼は動き回るでもなく、子供たちの席におとなしく座って、コーラを飲んでいた。ややあってお母さんがTさんのところに挨拶に来た。きかんぼうは自分の席を離れ、お母さんのところに駆け寄った。すると、お母さんは、内容は分らなかったが、大きな声で彼をしかつた。「席に戻りなさい」ということであっただろう。彼は文句を言うこともなく、一人で席に戻り、またおとなしく座っていた。ちなみにこの子は小学校一年生である。私はこの子たちにすっかり心を奪われてしまった。少なくとも、日本には絶対に居ない子供たちがいまここにいる。お酒の酔いも手



私は、「以上示した大人と大人の関係や大人と子どもの関係が理想的なものだから、そこに戻れ」などと言おうとしているのではない。ただ、近代化のなかで、日本はこのようなコミュニケーションを破壊してきたのだという事実を、いましっかりと認識しておく必要があるのではないかと思う。

(山形新聞より転載)

児童福祉制度化60年は 社会的養育に何をもたらしたのか

菅原 哲男

六月末、覚えのない女性から電話があった。聞くとその人は、前職場で出会った青年が借りているアパートの持ち主であると分かった。もう二十八年ほど前の児童養護施設に出入りしていたその青年は、その児童養護施設出身で、よく転職を繰り返していたことを憶えている。彼は、そのヴォランティアで、盆正月や連休などに自宅に数名の子どもたちを引き受けてくれた成田さんというご婦人宅にも出入りをし、ご厄介をかけていた。成田さんは本当によく子どもたちを受け入れて下さり、細やかな心配りをされ、広いお付

き合いの中から彼に適切な職場を探してくださりその保証人にもなっておられた。それでも寄る辺ない彼は、職を失い生活保護を受け、病に倒れて長い入院生活を繰り返していたという。成田さんがお年を召してから、彼は保証人になってくれと私に言うようになっていった。私などに頼みに来る者は他にそのような人を持つていないことであり、役に立てたら、と十数年前から引き受けてきた。その、私が保証人になってきたアパートの持ち主からの電話なのだった。聞けば、彼は前々日アパートを出て行ったという。そのご婦人は、「あなたのような人に十年を超えて保証人になってくれるような人は珍しい人だから、その人にはご迷惑を決してかけてはいけない」と日頃言い聞かせていたという。そして、事情があつて生活保護も解除された彼は、敷金の切れる月末に出て行ったのだという。彼の所在や安否を問うと、昨日公衆電話から電話があり公園で生活しているというので出かけていき、ホームレスになっていた彼に少しばかりの小遣いを持たせて

帰ってきたという。丁寧にお礼を申し上げて電話を終えたが、重い気分になったのであった。光の子どもの家創立の前までに数百名の子どもたちに出会ってきた。その中の数名が殺人を犯して服役した。また数名が首をつり、農薬をあおりなどで自死していった。ある者は餓死したと三年ほどまえに報せがあった。そしてまた彼がホームレスになったと報を受けたのである。児童養護施設に関わり始めた頃は、何と物好きな……などと揶揄されるほど職業としては認知されていなかった。大卒の初任給が三万円の時その半分ほどが目安の施設職員の平均的な給与であった。ほとんどが住み込みで職員宿舎があるのはいい方で、湯河原の施設では蜜柑の保管小屋を借りて住まわせていた。だから、子どもとそれに関わる大人との暮らしの水準や社会的地位はかなり接近していたのである。今、職員の処遇や社会的地位は昔日の感があるほど向上している。それは何よりも慶賀すべきことだろう。困難なこのはた

らきに見合った報いを受けることは当然である。しかし、措置延長が法律で保障されても、地方自治体の経済状況や児童相談所長の判断で多くの場合その道は閉ざされているのが現状だ。中卒で就職する児童養護施設の子どもたちは二十%に上る。彼らは服役や自死、餓死やホームレスと隣り合う地平を生きているのが殆どだろう。元々児童養護施設は、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする。と、児童福祉法四十一条は定める。何よりも子どもたちのための利益をこそ最も優先して求め続けなければならないものだったのだ。家族から、その生命身体の安全さえも得られなかった子どもたちが安心して法の下での平等をこそ享受し、生まれてきたことを感謝することが出来るような生涯を得られる条件と内実をこそ、心を、力を、思いを尽くして追求していかなければならない、と心から思ったことであつた。

ひとつの経験から

日本キリスト教団
平塚富士見町教会

西貝 正仁

私は今、神奈川県養護学校に勤めています。教員として採用され、最初に勤務したのは高等学校で、三校の高等学校を経験した後、希望して養護学校に移りました。転勤でこの四月から新しい学校に勤務していますので、養護学校も二校目となりました。

最近の新しい流れとして、「特別支援」という言葉が使われ、養護学校も「特別支援学校」と言いますが、ここではあまり堅苦しいことは抜きにしてこれまでの呼び方そのままでもいいと思います。高校から養護学校へ移るについては決してひとつだけの理由でそうだったのでありませんが、私にとっては、静岡にある「やまばと学園 成人寮」での経験が、力強く後押ししてくれたということができていると思います。

「やまばと学園 成人寮」は知的障害を持つ方の人所施設で、数日間この施設に滞在しました。家族三人での滞在でしたが、最初に施設利用者の方々と会った時には、

どうしたらいいのだろうか戸惑

ってしまつたことを覚えています。実はこの滞在は妻の学んでいた通信教育講座の実習のためのもので、本来私たちの行くべきところではなかったのですが、施設側の御好意もあり、おまけとしてついていたというのが実情でした。

妻の実習が主体ですから、私は何もせず、利用者の方々と共用スペースのホールで一日中のんびりと過ごさせてもらいました。これが私にとつてはよかったのかなと思います。障害を持つ方々とこれほど密接にお付き合いをすることは、私のそれまでの生活の中では全くなかったことで、特に知的障害を持つ方というのは、小学校の頃、特殊学級と呼ばれたクラスに居る子どもたちを遠くから見ている経験があるくらいでしたので、何をしたらよいかわかりませんでした。こんな私を見て利用者の方々も初めて見る変なやつに興味を持ったでしょう。(職員や実習生、ボランティアの人のように

働くわけでもなく、新しい利用者

なのかどうかもよくわからない。)また一緒に居た幼い息子にも興味を持ったようで、(息子が一番早く利用者の方々の中に溶け込んで、一緒に遊んだりテレビを見たり、自由に行動していました。)いろいろと自分たちのことを話してくれる方があり、ようやくその場になじむことができました。もちろん言葉で意思の疎通ができる方ばかりではありませんでしたが、私たちがそこに居るのを当たり前のこととして受け入れてくれたようでした。

私たちはこの滞在の期間中、また今でも「やまばと学園 成人寮」のことを話す時、天国はこのようなところなのだろうと言っています。それから二年ほど経ち、次の転勤先として養護学校の希望を出すことは、私にとって何の不思議もないことでした。

養護学校では、小学生から高校生までが同じ学校で学んでいます。また、現在勤務している学校では、知的な障害を持つ児童生徒と、肢体の障害を持つ児童生徒が、ひとつの学校の中で学んでいます。もちろん学習内容が違いますので、クラスはそれぞれの障害別に編成

されています。私が担当している

のは、知的障害部門の中学生です。前任校で最初に担当したのが中学生で、その後、ほとんど中学生を担当してきました。年によって生徒の人数は変わりますが、一学年十名程度を二クラスで運営しています。担任は生徒二、三名に一名ほどの割合で、複数担任制です。学校ですから、天国とは言えない厳しさを求められる時もあります。個性派ぞろい、日々刻々と変化する生徒たちと一緒にいることはとても楽しいものです。

私の勤務地は神奈川県なので、学校行事に是非おいでくださいとは申し上げにくいのですが、全国的に学校の授業公開なども盛んに行なわれています。皆さんのお近くにも養護学校があると思います。機会がございましたら、素敵な生徒たちをお訪ねいただけたら幸いです。



エッセイ

青大将

俳誌「浮野」のベテラン俳人 中里二庵先生の句に、おもしろいものがある。

元帥に近き青大将に逢ふ
というのである。大将が元帥に近い
というのだから、相当大きい蛇なん
だろうと思う。

人間に対して暖かい二庵先生のことだから、突然現れた大型の蛇に対しても同じように暖かい眼指を投げかけた筈である。「これはデカイ蛇だなあ。大将というより元帥に近いよ。」と笑うあの人がつっこい二庵先生の笑顔が目につく。

四月の末の或る日、私も比較的大きな青大将を見た。まだ四月だから元帥とまではいかなかったが中将か大将クラスにはなっていたと思う。

部屋の中から窓の外の新緑を見ていたら、窓際のモミジの小枝のところに、細いシッポが動くのが見えた。オヤ?と思うと目をこらしてみると蛇であった。急いでカメラを持って外へ出てみると、枝から枝へ渡る、まさに蛇である。青大将だと思っ

彫刻家 中島 睦雄

た。この当たりには、ヤマカガシだとかマムシだとかはいない。アズキヘビやシマヘビ、それに青大将などが、ごく一般的に棲息しているのである。

急いで何かカメラにおさめてみたが、スルスルと上手に枝を渡つて隣の柏の木の方へ去っていった。一メートル三、四十センチはあった。私は、去って行く青大将に向かって「早く出世して元帥になれよ。」と声をかけてみたが、彼は超然としていた。「人間なんて、つい最近進化してきた動物ではないか。オレ達ヘビ族の間は、人間よりも、もっともずっと古い種としての歴史をもっているんだぞ。」とでも言いたいような目つきをしている。

ところが、その輝かしい生存の歴史を誇る青大将が、最近埼玉県では絶滅危惧種に指定されたんだと、誰かが言っているのを耳にした。これは意外である。私どもの経験では、ヘビなんか殺そうとしたってなかなか死なないものなのだ。子供の頃、

友達との学校帰りにヘビを見つけた。すると、みんなで寄つてたかつて泥をぶつけたものである。その上、近くにある桑畑から桑棒を折り取ってきて、これでピシヤピシヤ体をひっぱたく。叩かれて動かなくなったのを、川の中に投げ込むと、ヘビは少し流されていって、そのうちに泳ぎ出し、生きかえってしまう。「頭をつぶさなければ死なねえんだよなあ。」と子供は語り合っている。もち論、子供たちは蛇を殺そうとしていたわけではない。遊び半分に蛇をからかっているだけなのである。蛇にとつては文字通り命がけなのだろうが、子供達はそんなのかまいはしない。それに、心のどこかに「蛇を殺すと、あとで祟るぞ」という恐れをみんな持っている。

そんなしどい青大将が絶滅危惧種とは、信じられないようである。蛇にとつては住みにくい環境、というより生存しにくい環境になつてしまつたということだろう。これは、人間がそのような環境を作ってきた訳であつて、蛇には責任はない。先日、都会に住む友達と話をしていたら、蛇の話になつていった。

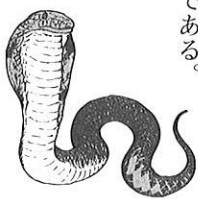
「一般に、都会のコンクリートで覆われた場所には蛇は棲めない、ということになっているんだが、いる

わいるわ、集団で棲んでいるのを見ちゃったんだよ。」と言う。

なにか、下水の工事があつたらしく、道路わきのコンクリートやアスファルトの部分を掘り返している所に、その友達が出くわした。すると、土管の中から蛇がたくさん出てきたというのである。

「そりやそうだよ。あそこにはドブネズミがいっぱいいるんだから、蛇にとつてはおいしい御馳走になるわけだ。つまり、あいつらは我々が思っている以上にしぶといんだから、都会にだって棲めないってことはないんだよね。」ということであつた。

都会でさえそんな風なのだから、わが家のまわりでは、まだまだ大いばりで蛇は生き続けている。ネズミだつて蛙だつて、たくさんいるのだ。蛇の餌は十分にあるということになる。したがって、当分わが家の近くでは青大将の絶滅はなさそうである。そのうちに、二庵先生をびつくりさせるような、本物の元帥になつて



河のほとり

倉澤家

残暑お見舞い申し上げます。

先日、卒園生が子どもを連れて遊びに来ました。六ヶ月になるその子が離乳食のじゃがいもやおかゆを食べているのを、うらやましそうに見ていたのは二年生の成黎でした。あまりうらやましそうにしていたので、「成黎も食べさせてあげようか？」と言うと、何の迷いもなく「うん。」という返事。

さっそく同じ物を私がスプーンで成黎の口まで運んであげました。味はほとんどついていないので、決しておいしい物ではないのですが、成黎は大満足。その後、乳児用の玩具にも興味を示し、楽しそうに遊んでいました。

生後四ヶ月で乳児院に入所した成黎は、実母に授乳されたことも離乳食を食べさせてもらったこともないのです。

かつて、私が娘にミルクを与えている様子を見て、哺乳びんの形の玩具を買い、ジュースを飲んでいた重紀や、りんごをすってほし

いと願った嬉と同様、彼もまた、ポッカリと抜けてしまった乳児期を、今、取り戻そうとしていたのでしよう。

授乳すること、離乳食を食べさせること、しっかりと抱きしめること。こんな当たり前のことが母と子どもの関係に、そして子どもの成長のためにどれだけ大切なことなのか——を再確認した出来事でした。

倉澤 智子



子どもたちの季節

仙道家

新年度となり、今まで原田家で生活していた高野グループが仙道家に引っ越してきました。そして、

私が担当していたグループを新しく仲間に加わった岩瀬に引き継ぎ、新しい仙道家がスタートし、早くも暑い夏がやってきました。

初めはお互い様子を窺っていた子どもたちですが、じきに慣れ、ハチャメチャで騒がしく落ち着かない生活になりました。そこへ三歳の広司が新しい仲間として高野グループに加わりました。

「かわいい、広司！」と一番年少の広司をみんなでかわいがってくれます。でも、同じ高野グループのメンバーの中にはやきもちを焼く子もいて、またまた毎日賑やかです。

やきもちも不平不満も何の遠慮もなく言えるのはいいのですが、私たちは血のつながりのある家族ではありません。

基盤となる人間関係を絶たれて光の子どもの家へやってきた子どもたちです。子ども同士、大人と子ども、お互いに言いたいことを言い、遠慮無く感情をぶつけ合うことはいいのですが、思いやりを忘れてしまったらギスギス、パサ

パサした関係になりそうです。そうならないよう高野グループ、岩瀬グループを少しでもサポートしていけたら、と思っています。

池田 祐子



光の中で

佐藤家

月日の流れは早いもので、一期はとうに過ぎ去り、子どもたちは夏休みを満喫しています。皆様、いかがお過ごしですか？

私の戦いは、小二の美歩ちゃんを起こすことから始まります。小学生は毎朝六時に起き、六時半に朝食を摂ります。その間、布団をたたみ、服を着替え、顔を洗う：など朝の三〇分はあつという間で



塩原 佐織

す。にも関わらず、朝が苦手な美歩ちゃんはなかなか起きられず、三〇分近く布団の中でぐずぐずしたり、「今日学校行かないから」との発言がでることも多々あります。指導員の協力のもと、毎朝、美歩ちゃんと奮闘しています。

しかし、そんな美歩ちゃんも、翌に一、二度、一回の呼びかけでむくつと起き、「おはよう」と目覚めることがあるのです。そんな時、私は笑顔で「おはよう！」と言

い、ぎゅつと抱きしめます。「日はすつきり起きたね、頑張ったね！」と起きられたことを共に喜びます。少しずつではありますが、確実に成長していると感じる事ができ、美歩ちゃんの自信にもつながれば：と日々、祈っています。

原田家日記

桜が終わり、紫陽花が目にも鮮やかな季節。早くも一年の半分が終わろうとしています。皆様いか

がお過ごしでしょうか。

先日、正太郎が母と電話で話していました。隣にいた担当の膝の上で、それを聞いていた彬。何とも言えない表情で、何も言わず、じいーと見つめていました。悲しそうでも、怒っているようでもなかったのですが、私はその横顔を見つめながら、ただ後ろから抱きしめていました。抱きしめたくなる表情でした。

電話が終わると、正太郎はまた外に遊びに行きました。正太郎は私の膝の上に乗ったまま、「〇〇さんに会いたい。ママに会いたい。」と大切なひとに会いたいと呟いたのです。私は「そうだよね：」と答えることしかできませんでした。

私はこういった瞬間、生活のなかで、自分の無力さを思い知らされ、同時に何とか出来ないだろうかと、悶々としています。ただただ傍に居ることしか出来ない。それでも何とかしたいとあがき続けます。

田口 貴子



季節のおとずれ

竹花家

入学してすぐに植えた朝顔もあつという間に蔓をのびし、もう蕾をつけています。毎朝、その朝顔の成長を楽しみにしているのは一年生の冬子です。「ママ！葉っぱ！」と芽が出たときはとても喜んでいました。その後も葉っぱが増え、蔓が伸び、つぼみをつけ：それを見つけたたびに興奮しながら報告してくれます。きつと花が咲いたときには、手を叩いて喜ぶのだろうと今から私もとても楽しみにしています。

先日、町の陸上大会がありました。出場できるのはクラス代表の選手のみです。竹花家の長男でもある六年生の誠一は一五〇〇m走に挑戦しました。練習の時は毎日のタイムに一喜一憂したり、「俺、選手じゃないかも」などと自信を



牧野由紀子

持てなかつたりすることもありました。が、見事選手として大会に出場することになりました。大会直前のサッカー練習中に腕を痛めてしまうというアクシデントもありましたが、大会当日は腕の包帯をはずして参加。真剣な顔で走る誠一の姿はたくましく、四月当初に比べても成長を感じることが出来ました。結果は四位入賞！たくさんの人に応援して頂き、また褒めて頂き、誠一にとって六年生としての良いスタートが切れたのではないかと思います。

もうすぐ夏休みが始まります。この夏もたくさんさんの体験を通して、ぐんと成長する子ども達と共に過ごすことが出来ることに感謝し、少しでもそのお手伝いができるよう生活作りをしていきたいです。

家族に関わる その24

入所 出生 絶対受容Ⅱ

菅原 哲男

前回、人間の発達段階の初めには絶対受容という受け止めが必要不可欠であることを述べた。

母性神話、三歳児神話を唱える進歩的な人々も多い中、私たちは親や家族から三歳児神話や母性神話などとは正反対の極にあつた子どもたちを四半世紀にわたって受け容れ養育に関わってきた。その子どもたちが表現する言動や暮らしの様式の乱暴きわまりないことは筆舌に尽くしがたいことも述べてきた。

三つ子の魂百まで、と言うこの国の俚諺が示すのは、だから三歳ぐらいまでの間だけでも丁寧な受け入れようという申し合わせだったのではなかっただろうか。また、三歳頃の子どもの行動や言動が示す人柄は百歳になっても変わらないという意味でもある。母性神話については、男女の性役割を産む者とそれを支える者と捉え、育てる者と産む者と異なる場合もあることをもう一度確認しなければ私たちの心はたけは成り立たなくなるのである。進歩的文化人たちが、三つ子の魂百までを利用してきた富国強兵時代をソ

ーカッしてその時代の常識さえも、坊主憎きに弊履のごとく捨て去り、新しがつてきた部分も否定できないこれまでの流れであつたと思う。

小林秀雄はその著「常識」で、常識の働きが貴いのは、刻々と新たに、微妙に動く対象に即してまるで行動するように考えているところにある。そういう形の考え方のとどく射程は、ほんの私達の私生活の私事を出ないように思われる。事が公になって、一たび、社会を批判し、政治を論じ、文化を語るとなると、同じ人間の人間が一変し、忽ち、計算機に酷似してくるのは、どうした事であろうか。と、述べている。さて、ウィニコットは、「遊ぶことと現実」で、母子関係の基本は、依存(dependency)であり、それに基づき、乳幼児期の母子関係を三段階に分けた。六ヶ月〜一歳前後の時期を移行期と命名し、絶対的依存〜六ヶ月頃自他未分化な受身的依存の時期。母親の原初的没頭と抱っこholdingが重要な意味を持つ。この時期の母子関係の問題は、精神病的障害につながる可能性がある。移行期は、絶対的依存から相対的依存

への移行の時期とし、移行対象の出現や、錯覚と脱錯覚の心理過程が見られる。

相対的依存・一歳前後〜自他は分化し、母親と子どもは、独立した個人として生きる。「母は必要である。」と心の中で知り始める段階で、子どもは依存と独立の葛藤状態にある。独立への方向をもつた段階・三歳前後〜、母親の養育がなくてもやっていける手立を持つ。二者関係から三者関係へ(競争・嫉妬)。社会性や自律性が芽生える時期。思いやりの能力。と述べている。

発達早期の乳児は、自分が欲求すれば、欲求が即座に満たされるという幼児的万能感を持つような関係の中で育つことを、新生児を計三名私たちの領域で育てた経験から確認している。

光の子どもの家の立ち上げの頃から、子どもは絶対受容という新生児と母親の関係を、ここをやってくる子どもたちに提供しなければならぬことを確認してきた。ウィニコットは、「絶対依存」と、私たちの養育への関わり方を子どもの側からの必然性として指摘していたのだ。絶対依存に対応する絶対受容の必然性がここに裏付けられていたのである。

過日、地域の壮年の方が養育相談に來られた。小学三年生を頭に三人の子

どもをおいて母親が家を出て行き、他の男性と暮らしているという。今後子どもを育てていくのに自信がない。出來れば里親が養子縁組などを考えてしまおう、と。聞けば彼には母親がいて子どもたちの養育を助けてくれたという。派遣社員の彼は経済的に困窮していて、このままの生活が維持できないというのである。里親や養子縁組に興味がないというのではなく、そこまで問題が付き着いていないのにそれを考えてしまう甘さが気になった。子育てを助けるような制度政策は必要だろう。しかし、何の困難もなく、楽に、本当に子どもがまともに育つのだろうか。子どものために自分が犠牲になることを過去の神話として退けてきたことだつたのだろうか。もう一度省みる時期に來て、かなり時が経っている。親は子どものためにいのちさえ惜しまないのではなかったか。もう一度、親と子どもの成長過程について考えようというところでその相談は終わった。

人間の真価は何を為したかではなく、何を為そうと生きてきたのか、だ(プラウニング)、から。



現場から

続・光の子らしく

③1

岩崎 まり子

家の周りの木々も、いつの間にかこんもりと繁り、田園風景が一層美しくなってきました。

皆様、お元気ですか。

先日のバザーでは、大変お世話になりました。皆さんの品物を多くの方々に日本中から頂き、また当日もたくさんのボランティアの方々にお手伝い頂き、更に「ありがとうございます」と笑顔で言ってくれたその姿に深い感謝と感動と、そして、襟を正すような思いがしました。そんな皆様のお陰で、子どもたちは大事なことを学んでいるのだと思います。

先日の母の日、子どもたちから

素敵なカードを頂きました。メッ

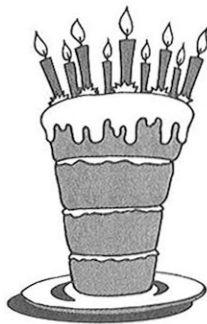
セージの長い子もいれば短い子もいましたが、ああ、こんな風に思っていてくれたんだ。と、しばらく頬がゆるみつつ放しでした。毎日当たり前のように弁当を持って出掛けていく高校生が、「毎日、早くから朝食や弁当を作ってくれてありがとう」と書いてくれたのには、たまっていた疲れも一気に吹きとぶ思いがしました。更に、さり気なく登校前に、

「冷蔵庫にケーキが入ってるから。」と言い、開けてみると母のケーキに「ありがとう」の文字入りのチョコレート。

「部活の帰りに友だちが買ってた

から、俺もちょっと買ってみた。」と言っていたけれど、その心遣いか、そして彼の成長が、私にはとても嬉しかったです。

またつい先日、もうあまりめでたくはない私の誕生日があり、これも盛大にお祝いして頂きました。中三の由子が作ってくれたケーキは、ダイナミックかつロクな感じのするもので、涙が出るくらいおいしかったです。段取りのところでコミュニケーションがうまくとれず、悔し泣きしてしまった場面もあった司会の理奈も、見事な手品を披露してくれ、鼻高々でした。



いつもいつも感謝を伝え合っているわけではありませんが、何事もなく一日が終わることは多くありません。何かしら不平不満を持ち、時折それを互いに爆発させたり、悔し涙をこらえることもあります。けれど、嬉しいな、楽しいな、かわいいな、と思える

一瞬が全てを超えさせてくれます。そんな風にしながら過ごせることは、とても幸せなことだと思っています。

先日、久しぶりに萌季が遊びに來ました。帰り途中のメールで「好き勝手なことして、いつまでも心配かけてごめん」とメッセージがありました。

心配をしたりされたりという関係に煩わしさより豊かさを感じるようになったのは、何となくのときだったでしょう。つい最近のような気がします。一方的に迷惑をかけた時、心配をかけるという関係はなく、実はやはりお互い様なのだろうと思います。

実際、「迷惑ばかりかけて…」や「心配かけて…」と言う子どもたちに、私は何となく皆さんの宝物をもらっていることか。

私は、これからも迷惑をかけ合いい、心配したいと願っています。どんな場面に立ち合おうとも、それでもあなたに会えて嬉しい、と言いつつ、伝え続けていくことのできる強さを持てるよう祈ります。逃げようとする自分を静かに鼓舞し続けながら。

子どもたちの待ちに待った夏休みの真つ最中です。

ホッワカゼ



2009年度も基準外職員確保の為に

「小さくても大バザー」を行います。

バザーの品物のご協力を

よろしくお願い申し上げます。



光の子どもの家 バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2008年4月1日▶5月末日

2008年2月

幼児3名 小学生18名 中学生6名 高校生7名 措置外5名
計39名

4月

- 1日 乃衣の入社式 いよいよ社会人となる 緊張した面持ちで入社式へ向かう
- 4日 進級進学祝い それぞれの歩みが一段階進むにあたってそれぞれの抱負を確かめる
- 8日 誠と美季の高校入学式 宗太と知香の中学校入学式 正太郎と冬子の小学校入学式
- 11日 東大宮教会の山ノ下恭二牧師による礼拝奉仕 感謝 横浜の社会福祉法人くるみの会の職員3名見学
- 16日 福岡市の子どもの村の副理事長坂本様以下4名見学 社会福祉法人福田会施設長中村様以下6名見学
- 25日 鈴木重義先生による職員礼拝奉仕 感謝

〈4月の物品ご寄贈者〉

後藤利子 石川順江 杉山和俊 田中和子 菊地昭夫 野村廣美 松本明子 古川景子 杉山和俊 大川誠子 加藤晶子 ダイエー ユニクロ 他多数の御各位様

5月

- 5日 子どもまつり「未来は自分で切り拓け」大勢のお客様

と卒園生が集まり 賑やかな一日 フォークシンガーのYAMATOさんによるステージ 東埼玉バプテスト教会の大橋君によるマジックショー 日本社事大と聖学院大の学生がお手伝いに来てくださった 感謝

- 11日 聖母愛児園職員1名見学 神奈川県立保険福祉大学看護学科の方が2名見学
- 14日 光の子どもの家後援会 赤十字奉仕団除草作業だったが雨天中止 心を込めて打って下さったうどんをおなかいっぱい頂く 感謝
- 21日 大根根中学校との定期連絡会 教育機関との連携の中で子どもたちのよりよい成長を願う心を共にして頂く
- 24日 第86回理事会 夕食会
- 28日 しずくの会 除草作業 感謝
- 29日 田村様 散髪奉仕 感謝

〈5月の物品ご寄贈者〉

間辺稔 大塚吉春 鳥越宏子 足立国雄 小山田貴子 杉山和俊 飯田洋司 野本百合子 齊藤米穀店 横村スミ子 島崎なぎさ 落合美佐子 新井せつ子 松本静江 宮崎春子 小谷野利子 飯野弥生 永島きよ子 木村作二 市川千代子 中村幸子 曾根秀子 ダイエー 中川キリスト福音教会 他多数の御各位様

皆様の善意を子どもたちへの関わりの力に致します (洋)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆立秋を過ぎてすっかり残暑であります。すがすがしい夏の日が続きます。☆子どもたちは楽しい夏休み真っ最中。☆夏が過ぎた頃の子どもの成長には目を見張るものがあります。☆二〇年近くにわたって毎年子どもたちがお世話になっている画家の谷本清光先生。☆長野県小海町にあるアトリエに子どもたちが泊まれるよう夫妻で準備して下さり八ヶ岳登山など多くの貴重な思い出を創らせて頂きました。☆先生が常々仰っている言葉「子どもはみんなで育てる」。☆色々な方にお世話になり善意を受けその度ごとにこの言葉を思い出します。☆皆様のご協力あってこそ子どもたちの成長です。☆だからこそその大きさに驚き心から感動するのだと思います。☆私たちの歩みが多くの方々からのお支えにより進められていることを日々確かめ感謝しながら一歩一歩進んでいきたいと思ひます。☆よろしくお願ひします。☆

(洋)